

名古屋市近郊における施設ナス園芸地域の研究

宇佐美みき代*

I 序 論

わが国における施設園芸の研究は数多くあるが、従来の研究は、輸送施設園芸地域を対象としたものと、近郊施設園芸地域を対象としたものに大別できる。輸送施設園芸地域の研究が地域研究の傾向が強いのにに対して、近郊施設園芸地域の研究は、いつれの研究も近郊施設園芸自身の特色・構造を追求する点に論旨が集約されていて、地域研究としての見方が欠けていたと思われる。施設園芸に地域の性格がどのように反映しているか、施設園芸は地域の条件・環境とどのように関係しているのかという視点で、近郊施設園芸地域をとらえる

必要があるのではなからうか。また、輸送施設園芸地域が高度経済成長下で大型化することによって、その地位を向上させてきたのに対して、近郊施設園芸地域は都市化の攻勢を受ける位置にありながら、どのように地域として自然・社会と対応しているのかを、明らかにすることも研究の課題の一つであろうと思われる。

従来、大都市への野菜供給は、近郊農業地域からされるのが常であった。しかし、高度経済成長以降、輸送園芸が高度に発展し、また、近郊農業地域の都市化が進み、農地の潰廃や経営の粗放化が進行したため、野菜供給は遠郊の輸送園芸地域に依存する度合が大きくなってきた。この動向は

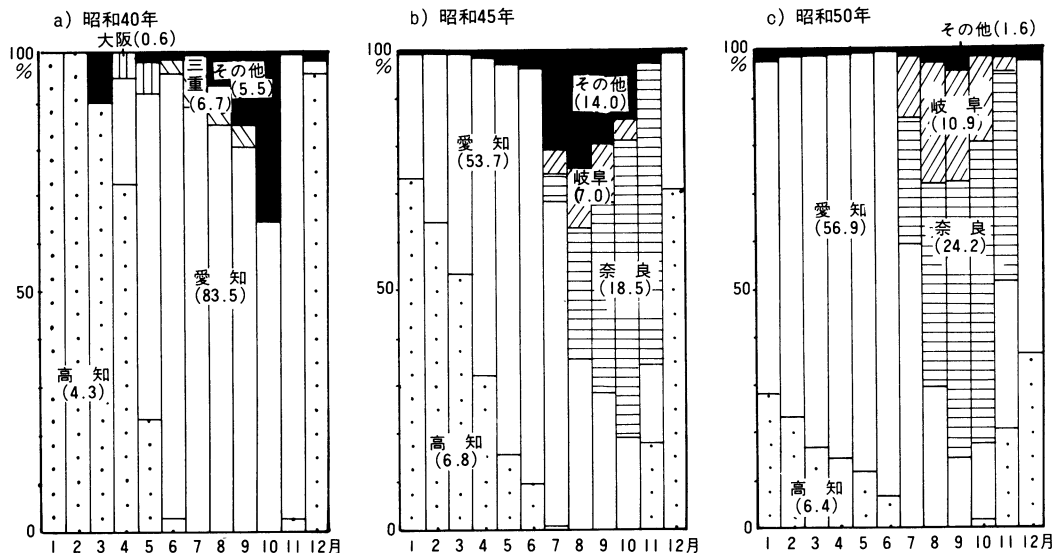


図1 名古屋市中央卸売市場におけるナスの月別・産地別入荷割合の変化 (各年次の名古屋市市場年報) ()内数字は、総入荷量に対する割合(%)を示す。

* 大治町立大治南小学校教諭

名古屋市場でもみられたが、施設ナスにおいては、

近年、輸送施設園芸地域を駆逐する近郊施設ナス園芸地域のみざましい成長がみられる。そこで、本研究では、発展傾向を示す名古屋市近郊の施設ナス園芸地域の地域的特色を明らかにし、そこにみられる発展要因を追求することを目的とする。

II 名古屋市近郊における施設ナス園芸地域

図1は、名古屋市中央卸売市場におけるナスの月別・産地別入荷量の割合を示したものである。昭和40年では、愛知県産は総入荷量の83.5%と大部分を占め、夏期から秋期の露地ナスによって市場を独占していた。冬期は、輸送園芸県高知県が完全に独占体制をとっており、これは施設園芸による促成ナスであったと思われる。昭和45年になると、高知県産は総入荷量の6.8%と増加傾向を示したにもかかわらず、冬期の占有率を低下させた。これは、夏期から秋期を出荷の中心としていた愛知県産が、冬期にも出荷され始めたためである。このことは、愛知県の施設園芸の発展の表現とみてよい。昭和50年になると、昭和45年にみられた傾向が一段と強まり、冬期・春期とも施設による促成ナスで愛知県産が市場の大部分を占めるようになった。以上のように、施設ナスは、輸送園芸県の高知県産から近郊である愛知県産へと、その入荷する産地が変化したのである。

次に、名古屋市近郊¹⁾の施設ナス園芸地域をみることにする。名古屋市近郊の施設作物の収穫面積は1,331haにのぼる。このうち、ナスは125ha(9.4%)栽培されている²⁾。このナス園芸地域は、図2のよう³⁾で、名古屋市近郊においては81.5%が愛知県である。そして、その集中する地域は、犬山扇状地の扇端部から自然堤防卓越地域の稲沢市北東部、木曾川下流の干拓デルタ地域、矢作川中流の低湿地域である。ここで、名古屋市中央卸売市場における施設ナスの入荷期間11月～6月に視点をあてると、総入荷量の26.6%が尾張、34.9%が西三河、

14.1%が東三河、18.8%が高知県、5.6%がその他の県によるものである。このことから、名古屋近郊施設ナス園芸地域は、愛知県に限られることになる。しかも、愛知県産としての発展への貢献度は、尾張と西三河が高い⁴⁾。したがって、名古屋市中央卸売市場において、近年発展傾向を示す施設ナス園芸地域は、名古屋市近郊の尾張と西三河に分布する施設ナス園芸地域であるといえる。そして、それが前述した自然堤防卓越地域・木曾川下流干拓デルタ地域・矢作川中流地域に集中しているのである。

施設園芸は各地で多種にわたる作物が栽培されていて、どの地域が施設ナス園芸地域であるかは明らかでない。そこで尾張地域と西三河地域について、修正ウィーバー法を用い、施設園芸の地域類型、さらに地域区分を行った。図3がそれで、他の作物よりもナスの割合が高い施設ナス園芸地域が明らかとなった。名古屋市近郊施設ナス園芸地域は、畑地の卓越する尾張平野の犬山扇状地から自然堤防卓越地域⁵⁾にかけの一宮市を中心とする地域と、水田の卓越する矢作川中下流域の左岸地域⁶⁾である岡崎市西部・西尾市北部とすることができる。そこで、施設ナス園芸地域⁶⁾の特色を把握するために、自然条件が対称的である畑地卓越地域・水田卓越地域から、それぞれ核心地域とみられる一宮市丹陽地区・岡崎市六ッ美地区を実態調査地域に選定した。

III 施設ナス園芸地域の特色

1 畑作地域の施設ナス園芸

—— 一宮市丹陽地区 ——

丹陽地区の概要 一宮市丹陽地区は、名古屋市から15km程離れた一宮市南部に位置している。この地域は、犬山扇状地末端から広がる自然堤防卓越地域であり、経営耕地面積402haのうち53.0%が水田、46.3%が畑で古くからの尾張の野菜生産

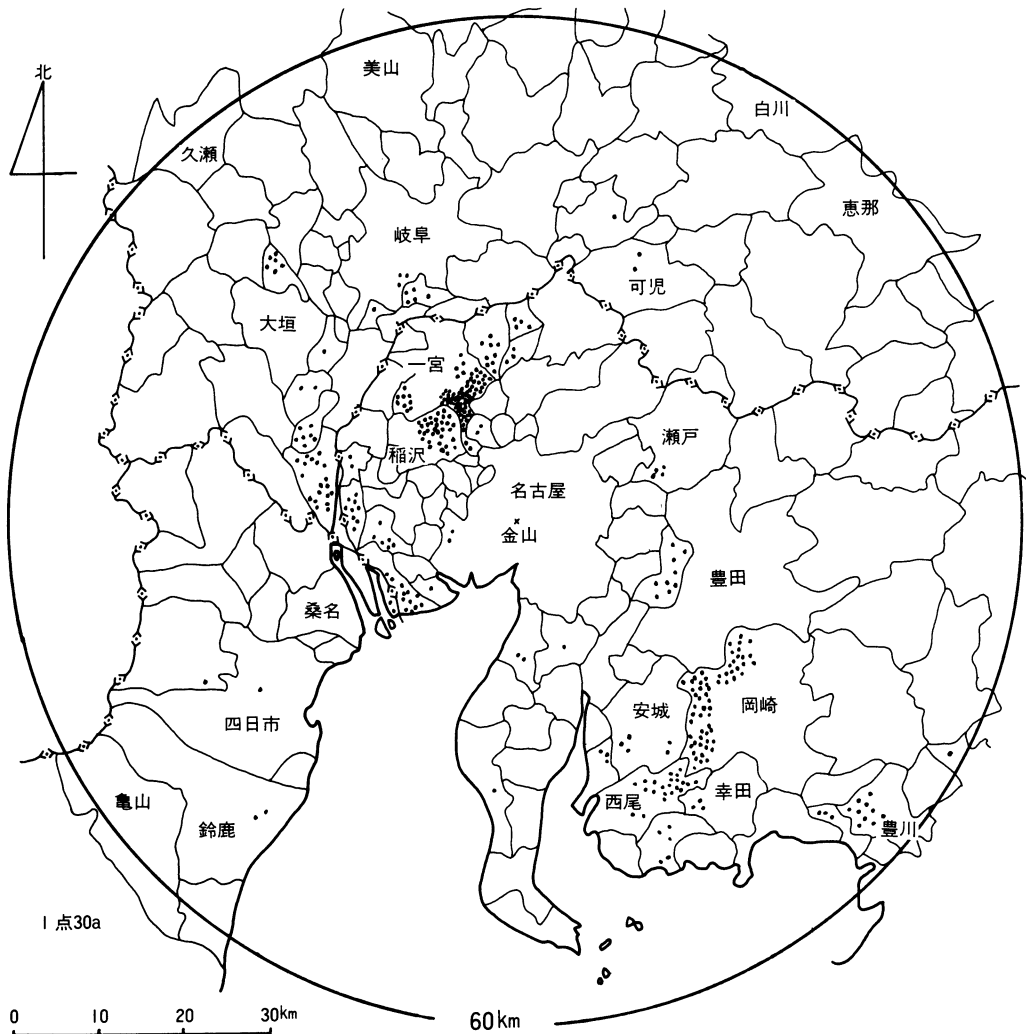


図2 名古屋市60km圏における施設ナス収穫面積の分布 (1975年農業センサス)

地である。地区の東部と南部が農業振興地域になっているのみで、大部分が市街化区域とされている。また、土地改良は南部しかされておらず、屈曲した畦畔がみられるばかりか、高さの異なる水田・畑が混在している。1975年現在、総農家数761戸で、第2種兼業農家率は66.2%である。1戸あたり平均経営耕地面積は52.8a(内水田28.0a, 畑24.4a)で零細といえる。このような状況の中で、施設のある農家は95戸あり、そのうち68戸の農家で施設園芸が行われているのである。

地域における施設ナス園芸の比重 畑地率が

46.3%と高いのは、自然堤防を利用した畑作地域であることを示している。したがって、農産物販売農家総数554戸中、野菜類を販売額1位とする農家が301戸にもものぼる。しかし、施設園芸を1位とする農家は76戸しかなく、農産物販売農家数の13.7%にすぎない。さらに、これを施設ナス栽培農家68戸でみると12.3%と非常に低い値となり、施設ナス園芸が地域に占める割合は低い。この施設ナス園芸の比重の低さは、施設ナス園芸が上層農家に限られているからである(表1)。地域での比重は低いけれども、個々の施設ナス園芸農家で

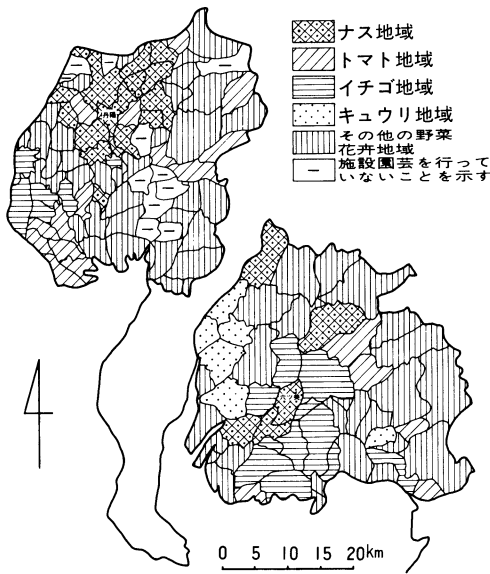


図3 修正ウィーバー法による尾張・西三河地域の施設園芸地域区分(旧市町村別)
(1975年農業センサス)

地域区分は旧市町村別に行い、作物はナス、トマト、イチゴ、キュウリ、その他の野菜と花きの5種についてである。

は、農家収入の84%がハウス収入と、その経済的依存度は高い。

畑作園芸からの段階的發展状況 丹陽地区では、ナスも露地野菜の1つとして古くから栽培されていた。農家では、より高い収益性を求めて、露地ナスをポリエチレンでトンネル栽培するようになり、昭和33年農家所得の拡大を目的にハウスが導入された。当時の先進地である大阪の富田林

を視察した後、丹陽ナス半促成栽培研究会が47名で始めたのである。当時は早い人で3月上旬定植であったが、ハウス設備の充実、つまり電熱線導入、ポリエチレンからビニルへ、また2重被覆から3重被覆へ、そして温風暖房機の導入などによって、徐々に定植期を早めてきた。現在、図4に示すように2つの作型で行われているが、長期一作栽培つまり加温栽培は、丹陽地区の68戸中、91.2%と大部分を占める。これは昭和45年導入の温風暖房機によって確立されたものである。このように丹陽地区の施設ナス園芸は、露地からトンネル、トンネルからハウス、さらにはハウスの高度化として、段階的に畑作から発展したのである。また、この過程において、各農家は、ハウス内設備導入による作業の省力化・技術革新によって、徐々に規模拡大を進めていったのである。

畑作の粗放化 図5により各農家別の経営状況をみてみよう。ハウスは水田・畑の両方にあり、ハウス面積における階層性はあまりみられないが、各農家は自家労働力の可能な限りハウス規模を拡大している。そして、ナス栽培は完全摘葉栽培であるため、長時間、管理・調整・収穫作業が続く非常に集約的なものである。したがって、普通畑があっても、露地野菜の集約的な栽培はできない。その結果、先の図5の各農家のように、畑は秋冬作を1回だけ栽培することになる。つまり、畑作

表1 丹陽における施設ナス園芸農家の階層性

項目 経営 耕地面積	総農家数	調査した施設 ナス園芸農家数	ハ ウ ス 面 積				
			20a未満	20a~30a	30a~40a	40a~50a	50a以上
150a以上	2戸(0.2%)	2戸(8.0%)	戸	戸	1戸	戸	1戸
100a~150a	48 (6.3)	11 (44.0)	2	2	6	1	
70a~100a	172 (22.6)	10 (40.0)		5	4	1	
50a~70a	151 (19.8)	1 (4.0)		1			
30a~50a	201 (26.4)	1 (4.0)		1			
30a未満	187 (24.6)	0 (0.0)					
合計	761(100.0)	25(100.0)	2	9	11	2	1

(1975年農業センサス・1979年8月実態調査)

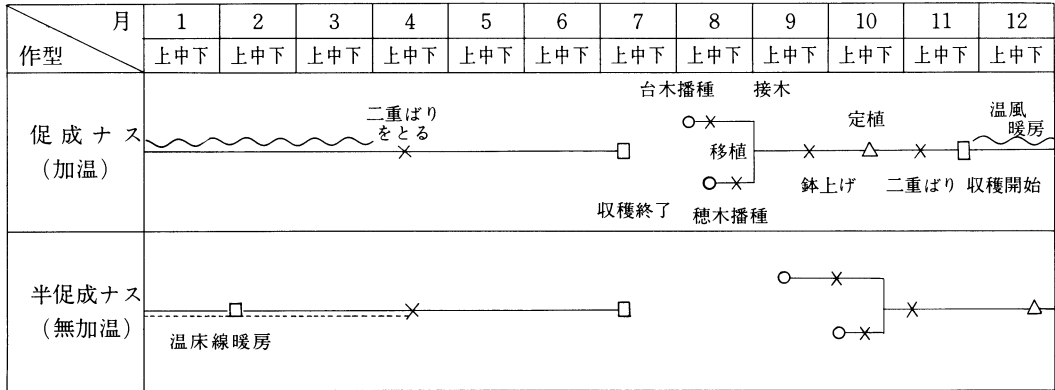


図4 丹陽における施設ナス栽培の作型と栽培暦

半促成ナス栽培は温床線を入れているが、1℃しか温度が上がらないため、無加温と考えられている。
(尾張農協ナス部会の促成ナス栽培こよみと、農家でのききとりによる)

は、キャベツ・ニンジン・サトイモを取り入れて、ナスとの競合を避ける。このような農家は経営耕地の多い農家で、全体の48%である。経営耕地の少ない農家では、荒地化や非商品作物の割合が高くなる。以上のように、家族労働力にたよる施設ナス園芸農家は、ナス栽培と競合する畑作部門を粗放化していく傾向にある。

ハウスとその分布 ハウスの立地場所は、42%が畑、58%が水田である。そのうち、畑の25.2%、水田の76.6%が借地である。施設ナス園芸農家は、ハウス自体を高度化し規模拡大していく中で、畑から水田へ、借地という形をとりながらハウスを立地させた。また、ハウスは市街化区域であることや土地改良が終わっていないため、パイプハウスが多く大型化していない。またハウスは、東西棟と南北棟が混在している。1戸の農家においてもハウスを1か所にまとめているのは56%しかなく、土地改良の終わっていない畦畔の入り乱れた自然堤防卓越地域の地域性が表れている。そして、ハウスの分布は連続的ではなく、地区全体に散在しているのである。

2. 水田地域の施設ナス園芸

—— 岡崎市六ツ美地区 ——

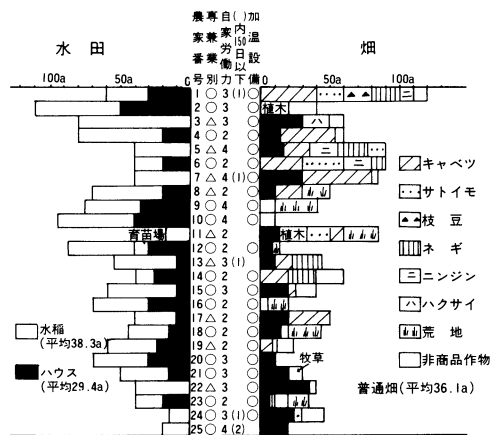


図5 丹陽における施設ナス園芸農家の経営状況
(1979年8月実態調査)
専業別の○は専業、△は第1種兼業である。
労働力で()内数字は内数である。

六ツ美地区の概観 岡崎市六ツ美地区は、名古屋市から35km程離れた矢作川左岸に位置している。この地域は、水田が耕地の78.9%と卓越した地域であり、昭和36年には耕地整理が終了して10a毎に区画整理されている。また、かつては水田二毛作の菜種や麦の栽培が盛んで特色をなしていた。現在は、北部と南部を除く大部分が農業振興地域になっている。総農家数1,412戸のうち第2種兼業農家が80.2%と兼業化が著しいが、大部分の

農家は水稻を主とする農業を営んでいる。1戸あたりの経営耕地面積は69.1aで、県平均に比べてやや大きく、水田54.5a、畑14.4aである。このような状況の中で、43戸の農家が、施設ナス園芸を全て加温長期一作型によって行っている。このうちの12戸で、ガラス温室でのキュウリ・トマト等の栽培も行われている。

水稲作との複合施設園芸 六ツ美地区も、地域全体の平均経営耕地面積69.1aに対して、施設ナス園芸農家の平均経営耕地面積は153.2aと大きく、上層農家で施設園芸は行われているといえる。施設ナス園芸農家は、労働力の可能な限り施設園芸を増やしているため、図6にあるように狭い畑の露地作にはほとんど力を入れず、平均80.2aある水稲を粗放的に複合させている。しかし、施設収入は、農家収入の84%とやはり高い依存度を示す。

水稲裏作から発展した促成ナス栽培 この六ツ美地区は、昔から稲作中心の地域であり、水稲の裏作として菜種や麦が栽培されていた。これらの栽培は昭和28年頃をピークとしていたが、相次ぐ凶作、生産性が低いこと、病害等によって徐々に後退した。これにかわるものとして、昭和33年頃からキュウリ・トマト・ナスのハウス栽培が裏作に導入されるようになった。当初は完全な裏作として行われていたが、昭和40年頃からは独立した施設園芸として、主にキュウリが作られるようになる。その後、ハウス内設備の充実が省力化をもたらして規模拡大につながり、その流れの中で、昭和46年～48年にかけて価格の安定したナスへと作物転換して、現在の促成ナス栽培（前掲図4上段）となったのである。

ガラス温室導入による労力分散 現在、施設ナス園芸農家の27.9%が、ガラス温室を導入している。このガラス温室は、ビニルの張り替えがないという省力化の意味で、キュウリ栽培時代に導

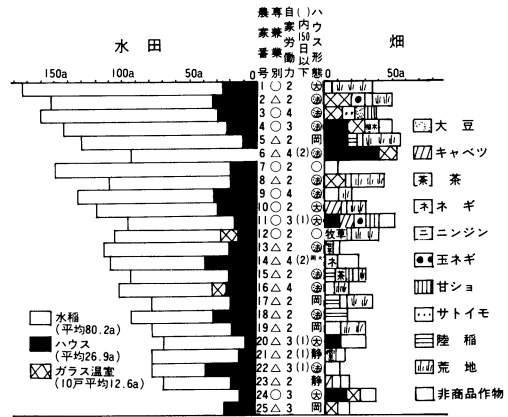


図6 六ツ美における施設ナス園芸農家の経営状況 (1979年8月実態調査)
専業兼業別の○は専業、△は第1種兼業である。労働力で()内数字は内数である。ハウス形態で⊕は51年組組合法人による大型、⊗は52年の大型、○は⊕⊗以外の大型、岡は岡崎型、静は静岡型のハウスである。

入されたのである。ガラス温室は、労働力が少ない施設ナス園芸農家でその割合が多く、ナスを中心としている現在では、ナス以外の作物（トマトとキュウリの1年2作が多い）で、時期的にもナスとの競合を避け、労働配分を考慮して導入されている。つまり、トマトはナスの育苗期間である8月に定植を終え、収穫も年内に1か月程である。この頃はトマトが隔日収穫で、ナスも収穫が開始されたばかりで量が少なく労力的には充分経営できる。キュウリもそのナスの収量が少ない時期に播種を終える。キュウリの収穫は、ナスの収穫ピークにあたるが、省力的な摘芯栽培をとっているため、毎日収穫するだけで手間がかからず、収穫後1日そのまま置いておけるので、隔日収穫のナスとうまく組み合わせている。

団地化されるハウスとハウスの分布 ハウスは、現在水田に83.6%、畑に16.4%立地しており水田が圧倒的に多いが、その水田の56.0%、畑の6.4%が借地である。この地域の借地は比較的新しく、大部分昭和50年以降に始まるもので、ハウスの大型化・団地化のためである。地域内に3か

所あるこの団地は、輸送園芸地域に比べれば極めて小規模なものである。ハウスの分布は、やはり旧六ツ美村全体に散在しているが、大部分のハウスが南北棟である。ハウスのまとまりも1か所という農家が84%と多く、広く画一的な水田地域の性格が表れている。

広域化した出荷組織 この六ツ美地区は、西三河促成ナス部会という大きな出荷組織の中に含まれている。この部会は、岡崎市の3つの農協（六ツ美・矢作・葵）のナス部会をまとめた岡崎市施設野菜振興会に、西尾・三好・幸田の各農協のナス部会が加わって組織されている。この組織化は、昭和48年に始まるもので、行政区画を越えた西三河一円の組織で、全体の共同計算方式がとられている。出荷組織の一元化は、流通販売の計画化と適正出荷による価格の安定、さらには施設園芸農家の所得増大等を目的として行われたものである。また、組織が広域化することによって、近隣産地間の市場での競争を避けられることにもなるのである。

3. 両地域の特殊性と共通性

両地域の差異と特殊性は、自然条件の差異、つまり畑地に卓越するか水田に卓越するかが、深くかかわっていると思われる。まず、畑地卓越地域では畑作園芸の高度化として、水田卓越地域では従来の商品生産の破綻から水田裏作として、施設園芸が始められ、その起源を異にしている。また、畑作地域では加温栽培・無加温栽培が混在しているのに対し、水田地域ではガラス温室が導入されているが、これは複合経営部門との組合せの仕方が異なるという、地域の基盤農業の差異に基づく特殊性であると思われる。この他、景観的なハウスの形態・向き・まとまり方などにも差異がある。これらは、自然条件に加えて、土地改良や市街化区域などの社会的条件の差異が生み出すものであ

るといえる。

輸送施設園芸地域が高度経済成長下で、地域分化をともしつつ産地の大型化を実現してきたのに対して、この両近郊産地では、兼業化が進む中で、自立経営農家つまり地域の上層農家だけが施設ナス園芸を導入してきたという共通性も持っている。そして、両地域とも、地域における比重は低いけれども、分散した園芸農家が出荷を共同化し集まることによって、名古屋市近郊の施設ナス園芸地域を形成しているのである。また、従来、近郊蔬菜園芸地域は多種類の蔬菜栽培を特徴としてあげていたが、両地域とも、ナスに専作化して、農業収入におけるナスの比重が高いことが共通点として指摘できる。ハウスの分布にも共通性がある。施設ナス園芸が上層農家でしか導入されていないことの景観的な反映として、ハウスは両地域とも散在立地している。これは、近郊施設ナス園芸地域の特色であり、輸送施設園芸地域にみられる全面的・連続的な分布とは、非常に対称的な景観である。

IV 施設ナス園芸地域の発展要因

1. 加温長期一作型栽培技術の定着

名古屋市近郊施設ナス園芸地域は、畑地卓越・水田卓越の両地域でその起源を異にしているが、当初の3月定植から漸次前進栽培を進めて、現在の加温長期一作型となった。高知県では、すでに昭和33年頃、暖地を生かした無加温栽培が可能となっていた。それに比べると名古屋市近郊での前進栽培の進行状況は非常に遅かったのである。名古屋市近郊施設ナス園芸地域は、加温長期一作型が定着したことによって、出荷期間を長期化させて発展することができたといえる。そして、この加温長期一作型、つまり促成栽培は、畑地卓越地域・水田卓越地域の両地域で定着しているのである（表2）。

表2 名古屋市近郊における施設ナス園芸地域の現況

施設ナス園芸地域	※総農家	※第2種兼業農家率	※施設のある農家率	※ハウスのある農家	ハウスナス園芸農家	※ナス収穫面積	ナス収穫面積	促成栽培	半促成栽培	暖房機導入年次	共同出荷	運送会社への委託	出荷先	経済連の指示	
畑地に卓越する地域	一宮市	7,113戸	77.9%	3.5%	240戸	92戸	2,268a	2,450a	○	○	S.45年	農協 ○共計	名古屋	従う	
	丹陽町	761	66.2	12.5	93	66	1,244		○	○	S.48年				
	尾西市	1,938	85.7	1.8	2	2	8	30	○	×	S.48年		岐阜		
	稲沢市	4,300	57.2	7.0	281	50	988	920	○	○	S.45年	○部落共計	○S.48年	名古屋	参考
	江南市	2,473	74.4	3.1	74	23	318	300(150)	○	○	S.47年	○農協共輸	○S.49年	名古屋	参考
	大口町	1,145	67.9	3.0	30	6	100	130	×	×	S.47年	○部落	○S.47年	岐阜	参考
	扶桑町	1,055	84.3	2.0	21	12	140	140(140)	×	○	×	×	×	岐阜	参考
	小牧市	3,426	90.2	1.7	51	1	127		×	○	×	×	×	名古屋元地	
西春町	819	71.4	1.2	9	5	83	100(100)	○	○	×	×	×	名古屋		
水田に卓越する地域	岡岩津	1,210	72.8	24.0	82	31	649	650	○	×	S.43年	○共計	名古屋	従う	
	崎矢	881	84.5	9.9	289	24	645	610	○	×	S.43年				
	市六ツ美	1,412	80.2	5.9	81	44	604	930	○	×	S.43年				
	西尾市	5,050	72.4	6.6	313	21	725	600	○	×					
	幸田町	1,916	74.6	7.5	139	8	120	120	○	×					
三好町	1,227	68.8	3.7	43	16	288	309	○	×			関東			
													関西		

空白は資料が得られなかったことを示す。()内数字は収穫面積中の半促成ナスの収穫面積。ただし、一宮・稲沢市については、促成ナス収穫面積のみ記されている。共同出荷の「農協」「部落」は出荷の単位、「共計」は共同計算、「共輸」は共同輸送を示す。この出荷はすべてもちより共選によっている。

(※が1975年農業センサス、その他はすべて1979年10月実態調査による)

2. 施設ナス園芸の専作的経営化

促成ナス栽培は、10aあたり1,793.7時間の労働時間を必要とする非常に労働集約的な園芸である。そのため、畑地卓越の施設園芸農家は、普通畑は粗放的な秋冬作物一作だけにして、ナスとの競合を避けるようにしている。水田卓越の施設園芸農家も、平均80.2aある水稻栽培を、ナスと重なり労働力が足りないことを理由に、何らかの作業を委託しており、全面的に経営委託をする農家もみられるほどである。このように、名古屋市近郊施設ナス園芸地域では、複合経営部門を粗放化・単純化し、輸送施設園芸地域でみられるように1つの作物、つまりナス栽培を専作的に経営することによって発展したといえる。

3. 各種補助事業と各種制度融資の利用

施設ナス園芸地域において実施された補助事業

をみてみると、畑地卓越・水田卓越の両地域とも、その受益面積は非常に広く、施設ナス園芸の安定・育成・近代化が図られたことはいうまでもない。また、施設園芸のような資本集約的経営においては、経営主体の資本負担能力が経営成立の重要な条件であると思われる。その意味で農家を助けたのが各種制度融資である。各種制度融資は、すべての農家が1回以上は利用しており、その果たした意味は大きい。以上のような各種補助事業・制度融資の存在に支えられて、名古屋市近郊施設ナス園芸地域は発展したと考えられる。

4. 出荷の共同化・組織化

前掲の表2からもわかるように、名古屋市近郊の施設ナス園芸地域は、第2種兼業農家の増加の中にあつて、非常に施設農家の割合が低い。さらにそれをナス栽培農家に限るならば、その割合は

著しく低くなる。このように地域内に栽培農家が散在する状況の施設ナス園芸地域が発展できたのは、地域内で出荷を共同化し組織化することによって、大型産地に対抗することができたためだと思われる。現在、出荷は、一部市町村を除き大部分が運送会社に委託する共同出荷体制をとっている（前掲表2）。特に、西三河においては、前述したように行政区域を超越してひとつに組織化されているのである。出荷先は母都市である名古屋市以外の遠方の地域もあり、輸送園芸化している。このように、名古屋市近郊施設ナス園芸地域は、従来の近郊農業の最たる特徴であったばら荷による個人出荷から、出荷を共同化・組織化することによって量をまとめ、産地として市場側への要求・影響力を持つなど、輸送園芸化して発展したといえる。

5. 園芸に対する伝統性の存在

発展要因を考える時、その地域に存在する商品作物栽培、つまり、園芸に対する伝統性も忘れられないものである。畑地卓越地域は、古くから自然堤防を利用した野菜生産地として、多種多様の野菜が栽培されていた地域であり、水田卓越地域においても水田には水稻・麦・菜種が、自然堤防では古くからネギ・ニンジンなどが栽培されていた。農業高校の出身者も多く、農業に対する意欲が旺盛であった。この意欲が、ナスの前進栽培を漸次進めていった原動力でもある。このように、この地域には園芸に対する伝統性が存在していたのである。

6. 有利な自然条件

名古屋市近郊施設ナス園芸地域において、園芸の伝統性があり、近年の施設ナス園芸を進展させ支えている基盤の一つは、自然条件である。肥沃な土壌である自然堤防にめぐまれていたことが、

これである。

V 結 論

1. 近年、名古屋市近郊施設ナス園芸地域は、冬期の名古屋市場において、従来独占的地域を占めていた輸送施設園芸県・高知県をしのごぎ、市場出荷量の大半を占めるまでに発展してきた。その名古屋市近郊施設ナス園芸地域は、典型的には畑地の卓越する尾張北部と水田の卓越する矢作川中・下流域にある。

2. この施設ナス園芸地域の特徴として以下の点が明らかとなった。

① 施設ナス園芸地域は、畑地卓越地域においては露地畑作園芸が高度化したものであり、水田卓越地域においては水稻の裏作として施設園芸が始められて、その起源が異なっている。

② 施設ナス園芸は、上層農家で行われている。地域における園芸の比重は低いが、各園芸農家では、普通畑作・水稻作などの複合経営部門を粗放化・単純化し、施設ナスの専作的傾向を示している。

③ 施設ナス園芸農家は、ハウス内設備を充実させ省力化を図りながら、ハウスの規模拡大を進めてきた。現在では、加温長期一作型によってナス栽培を行っている。

④ 施設ナス園芸地域は、都市近郊にありながら、出荷は組織的な共同出荷を行っている。

⑤ ハウスは地域に散在していて、ハウスの大きさ・向き・まとまり方に、それぞれの地域の自然条件・社会条件（土地改良・市街化区域）が表現されている。

3. このような特色を示す名古屋市近郊施設ナス園芸地域の発展要因としては、以下のことが考えられる。名古屋市近郊の施設ナス園芸地域には、肥沃な土壌と園芸に対する伝統性が基盤として存在していた。そこに、加温長期一作型のナスを、

複合経営部門を単純化・粗放化して栽培することが定着したのである。さらに、この地域での普及・定着をより強固なものとして確立させたのが、組織化された輸送園芸としての共同出荷である。これにより産地化することによって、輸送園芸県・高知県産ナスに打ち勝ったのである。また、各種補助事業と各種制度融資によって、地域の発展が側面から支えられたことも忘れてはならない。このように、要因が相互に関係し合って、名古屋市近郊の施設ナス園芸は、畑地卓越・水田卓越の両地域において同様に発展してきたのである。

謝 辞

本論文をまとめるにあたり、終始御指導いただいた松井貞雄先生をはじめ、愛知教育大学地理学教室の諸先生方、ならびに御協力いただいた関係諸官庁・農家の方々に厚く御礼申し上げる。

注

- 1) 従来、名古屋市近郊という概念は、木曾川以東に限られることが多かったので、本研究では、便宜的に名古屋市60km圏として考えた。
- 2) 1975年農業センサス
- 3) 昭和51年11月から昭和52年6月である。
- 4) 東三河の分布は豊橋市老津地区を中心とする地域であるが、この地域は、距離的にも名古屋市近郊とはいいがたく、収穫量の70%を京浜、15%を北陸、10%を中京（地元を含む）へ出荷するために、名古屋市中央卸売市場における愛知県産としての発展への貢献度は弱いと考える。
- 5) 一宮・丹陽・北方・萩原・稲沢・大里・起・古

知野・布袋・小牧・北里・扶桑・大口・西春
春日（旧市町村名）である。

- 6) 岩津・六ツ美・西尾・三和・三好（旧市町村名）である。
- 7) 重装備化したハウスを建てるには、まとめて建てられる水田のほうが適している。
- 8) ガラス温室は、ナスの色の発現に大きな影響力をもつ紫外線の透過率が悪いため、ほとんどナス栽培には使われない。

引用文献

- 愛知県農林部編（1966）：愛知のやさしい
岡田正平（1957）：矢作川流域の菜種作地域 愛知教育大学地理学報告9・10, 31～36
坂本英夫（1964）：高知県における園芸農業の形成と地域的展開 人文地理16-5, 15～33
沢田裕之（1972）：神奈川県秦野市の花き温室園芸 地理学評論45-8, 549～560
土井喜久一（1970）：ウィーバーの組合せ分析法の再検討と修正 人文地理22-5・6, 485～501
松井貞雄（1966）：甲府盆地西部地域の温室園芸 人文地理18-4, 1～25
松井貞雄（1967）：淡路島の温室園芸 人文地理19-3, 1～29
松井貞雄（1979）：高知施設園芸地域の地域的変化 地理学評論52-2, 66～82
八城美智子（1963）：名古屋市近郊温室園芸地域の地理学的考察 愛知教育大学地理学報告20, 50～57